

多様な子どもたちが参加するダンスワークショップの研究—児童期の子どもにおける相互理解に焦点を当てて—

お茶の水女子大学大学院
山本結

1. 研究背景と目的

近年、学校教育や福祉領域においてインクルーシブ教育の推進が重視され、芸術活動が果たす役割に注目が集まっている。特に、障がいの有無や生活背景の違いを超えて子ども同士が関わる場面において、芸術を介した共同体験は、相互理解や社会的スキルの獲得に大きく寄与するとされる（原田・眺野, 2025）。芸術の中でもダンスは、言語に依存しない表現手段であり、参加者が身体を通して他者と関わることを可能にする点で、インクルーシブ教育や福祉実践において重要な可能性を持っている（岩谷・廣兼, 2009）。

そこで本研究は、特別支援学校と児童養護施設において実施されたダンスワークショップを対象とし、児童期の子どもたちが共同創造を通じてどのように相互理解を形成していくのかを明らかにすることを目的とする。ここでいう自己理解とは「自らの感情や感覚を身体を通じて認識し直すこと」、他者理解とは「他者の表現や行為を受け入れ、関係を築くこと」、そして相互理解とは「自己理解と他者理解が相互に作用し合い、共同的な学びを可能にするプロセス」を指す。

2. 研究方法

本研究では、2024 年から 2025 年にかけて、特別支援学校 1 校と児童養護施設 1 校において実施されたダンスアウトリーチ活動を事例として取り上げた。調査方法としては、①ワークショップにおける参与観察、②活動の映像記録の収集、③アーティストへの半構造化インタビューを行った。特に観察においては、子どもたちの非言語的行動、相互作用、表情の変化などを記録し、進行に伴う変化を時系列で整理した。

3. 結果と考察

本研究での記録を分析した結果、子どもたちの変容や関わりは主に 4 つの観点に分類された。

(1) 自己理解と他者理解の促進

特別支援学校では、音楽が流れ始めても椅子に座ったまま動かない児童がいたが、アーティストが隣で小さく肩を揺らすと、その動きを真似るように身体がわずかに傾いた。やがて彼は立ち上がり、他児の動きを観察しながら自分のリズムを刻むようになった。児童養護施設でも、腕を組んで壁際に立っていた児童が、友人に手を取られると一歩ずつ動きを加え、最終的には自分から円の中央に出て表現を始める場面があった。これらの様子は、子どもが自己の感覚を認識し直す「自己理解」と、仲間の表現を受け入れる「他者理解」が

相互に作用する過程を示していると考えられる。

(2) 安全で自由な表現環境の重要性

両現場で共通したのは、アーティストが「やりたくないときは見ていてもいい」と繰り返し伝え、強制のない空気を作り出した点である。特別支援学校では、最初は端に立っていた児童が、自分のペースで動きを取り入れ、終盤には全身を使った表現を見せた。児童養護施設では、途中で輪から外れて休んでいた子が、再び仲間の笑い声に誘われて参加し、思い切り両手を振りながら走り出した。こうした姿から、子どもが安心して「やってもいい」「やらなくてもいい」と思える環境こそが、自由な表現を引き出す基盤であると考えられる。

(3) 社会的交流と積極的参加の促進

特別支援学校では、一人の児童が突然大きなジャンプをした際、周囲の子どもたちが次々にその動きを真似し、「ジャンプの連鎖」が生まれた。児童養護施設では、普段あまり口をきかない二人の児童が、背中合わせでリズムを刻む課題に取り組む中で笑顔を見せ合い、活動後も一緒に行動する姿が見られた。アーティストも「子どもたちが互いの存在を肯定する瞬間が、活動の中で生まれていた」と語っている。これらは、ダンス活動が社会的交流を促進し、消極的な子どもの積極性を引き出す効果を持つことを示していると考えられる。

(4) 生活共同体における関係性の再構築

児童養護施設では、日常的に共に生活しているがゆえに固定化した関係性を持つ子どもたちが、新しい関わりを築く姿が観察された。ある児童は、普段から衝突の多い相手とペアになり、最初はぎこちなく距離をとっていたが、次第に相手の動きに呼応し、最後には手を取り合って回転する表現へと展開した。この点から、ダンスが生活共同体の中で固定化した人間関係を刷新し、互いの存在を新たに捉える契機になると考える。

4. まとめ

本研究は、特別支援学校と児童養護施設におけるダンスワークショップを調査し、子どもたちが共同創造を通じて相互理解を深めていくプロセスを明らかにした。その過程では、子ども自身の感覚や感情を再確認する「自己理解」と、仲間の表現を受け入れる「他者理解」が相互に作用し合っていた。また、自由で安全な表現環境の存在が自己表現を支え、積極的な参加を促進することが確認された。以上より、ダンス活動は表現を媒介に新たな繋がりを生み出し、互いの存在を受け入れ合う場を創出するうえで重要な意義を持つと考えられる。

引用参考文献

・原田純子・眺野花 (2025) 「ダンスの発表・鑑賞・創造を通じた交流における社会包摂機能の可能性—地域連携事業「ダンス・シェアリング・デイ」および「チャレンジド・ダンスワークショップ」を事例として—」『人間健康学研究』18 巻 137-146・岩谷友洋・廣兼志保 (2009) 「インクルーシブダンス授業でのグループ創作活動場面における知的障がい児の変容に関する一考察」『山陰体育学研究』24 巻 37-55